

生活史としての庶民信仰

——江戸時代を中心として——

はじめに

我国の宗教は、原始社会から現在に至るまで長い歴史と共に多彩な展開を遂げ、壮大な宗教文化を築き上げてきた。そしてこれらは、我々の生活に深いかわりをもたらしながら、ことに庶民の間の信仰生活を極めて錯雑している。よって、日本が世界宗教の宝庫といわれる条件を十分にかねそろえているわけであろう。

しかしながら、ここでとらえる宗教とは、その定義付は一言では困難であり、ことに論述すべき庶民信仰とは如何なるものであるかということになる、また極めて難しい問題となってくる。だが、ここではその定義を決めておかなくてはならないであろう。それについて論述は後記することとして、大きくは、前者は、我々にとって身近な仏教やキリスト教の如く、国を越えて広範囲にわたり信者をおき、広大な組織の上になつて教祖から信者へと信仰を伝導してゆくものであり、後者は、特定の教祖がおかず、市町村など、狭義の組織の地域社会において日常生活を送っている数多くの民衆の間に培われてきた信仰、いわば自然宗教的なるものであると考えられる。

庶民信仰史の研究は、多くの場合、宗教の立場でこれが論じられてきたが、ここでは、時代との関連の中でこれを庶民の生活史の一端と

山本文乃

してとらえようとするものである。

特に江戸時代は、混沌と創成が社会のあらゆる方面において、交錯しながらも近代生活文化の展開の諸条件が芽生え出した時期であった。また、各村々の文化的個性なども極めて豊かになり民衆の中にも浸透してきた。この国土に根を張った日本人の文化生活が、町にも村にも熟し実つた時代でもあつた。

そのような時代にあつて、庶民生活の中で信仰が如何なる部分を占めていったのであろうか。そして、その実態とそれらの侵透性を時代の背景を踏まえながら明らかにしてゆきたい。

一、江戸時代の庶民信仰の意味

庶民信仰の意味を知る上においてその領域を定めるとすると、既成宗教の土着化の推移の中で、本来の宗教要素が変貌したものであると考えられる。その例としては、日本においては、江戸幕府によるキリシタン禁制の法網をくぐりながらその信仰を子孫へと伝えていった隠れキリシタンや、中国に発生した陰陽道宿曜道などがあげられる。

日本の庶民信仰の領域を広げていくとあまりにも広範囲になりすぎる。それは、原始素朴な自然宗教、民族宗教、また、仏教やキリスト教などの外来宗教の伝来土着化の過程に派生した神仏習合などの問題

を大きくとらえなくてはならなくなってくる。しかし、ここではそれら全てについて触れることは誌面に限りがあるので、その一部分を抽出し、その中から我国における庶民宗教の特色と実相をみることにする。

まず、庶民信仰の特色として、第一には現世利己的性格、第二に呪術的性格があげられる。第一の特色としてあげた現世利己的性格をもっともよく現わしたものと、「苦しい時の神頼み」という言葉がある。日本人は大小、善し悪しにかかわらず自分達に幸運をもたらしてくれる神があれば、えり好みせず受容してきた。そこにもこの性格が強く出ているわけであるが、それゆえに福神達もまた期待にこたえるべく機能を發揮してきたわけであろう。しかし、全ていつも願望成就するというわけではない。特に、農業、漁業、山村などで生計をたてることの多い日本人にとっては、大漁や豊作を願う気持ちが現世利己的にならざるをえなかったのであろう。この性格は、原始から今日に至るまで生活をする中に少なからず生き続けているのではないだろうか。第二の呪術的性格としては、先に述べた現世利己的性格とは密接な関係をもっている。これは、例えば、神体に手を触れ、病気の部分を治す方法や、護符などまだ数多くあげられる。これらは、文明の未開発な段階においては民族を問わず、濃厚な呪法が生活を強く規制している。しかしながら、科学の進歩に伴い合理的になってくるにしたがい、この呪術性は我々の生活の中から一歩づつ後退してきたように思われる。「雨乞い」などの行事もだんだん影を潜めてきている。だからといって全て衰退したわけではなく、昔ながらに子孫へと受け継がれたその家系独特の方法もまだまだ残されているであろうし、今日新しく生まれてくるものもあるであろう。ことに、我国の庶民信仰は、この呪術性が強く現われていることにはまだまだ研究の余地があるのではないだろうか。次に、庶民信仰の実相としては、以下のよう

に分けられるであろう。

- ① 土地に対する信仰の対象
屋敷神（家の屋敷地の守護神）
サエの神（道祖神とも呼ばれる）

- ② 屋内における信仰対象
かまど神（土間に厨房が作られそのなかまど神が奉られてい
る）

- ③ エビス神 大黒神（福神であるエビス・大黒の二神を奉る神棚が
ある）

- ④ 神棚
納戸神（一家の財を守護）

- ④ 民間の生産と信仰
水田耕作と田の神信仰
山仕事と山の神信仰
漁業神と舟霊信仰

二、江戸時代の特色

この時代は、中世社会が解体し、近世社会がつくられていく段階で、分権の封建制から中央集権的性格の著しくなる封建制への過渡期であった。そして、將軍を頂点とする武士たちの主従制などを軸としてこれに基づく生産制が貫徹された点でこの時代はもっとも典型的な封建制が現前していた。そしてこのような時代が二百数十年続いたわけで

あるが、この封建制がもつとも典型的にあらわれたことによる生活文化の封建的典型が化石文化といえるような固定化を見せるようになってこれが日本史上における大きな特色ともなったのであろう。

これまでの時代においては、朝鮮、中国その他、東洋のみが日本にとっての世界であつたのに対し、ここにおいてはじめてヨーロッパが加わつて世界が拡大したといえよう。この時代になつて急激に世界が広がり、それが再び鎖国によつて狭められてゆく過程は、日本の歴史上において重大な変化をもたらしたといえる。経済生活も上昇への傾向を示し、衣食住をはじめ、精神的文化の面においても近代社会における日本人の生活様式の原型ともいふべきものの多くがしだいに準備され、かつ整えられつあつたことは注目されるべきことであらう。

しかし、日本の海外進出は、一六二〇年代から三〇年代に大きく変容している。その要因の第一は、幕府のキリスト教への禁圧政策の強化であらう。幕府は、国内の統一支配の体制を一層強固にするために、反幕府勢力に利用されやすいキリスト教団勢力を一掃しようとし、そのために国内諸勢力の海外との接触を禁止する方策をとつたのである。そして第二の要因は、海外情勢力の変化であらう。

以上述べたように、十六世紀前後の社会の時代的特質は、分権から統一への武士支配の時代の完結など諸点があげられるが、このことは当代の生活や文化に様々な姿で反映されている。

十六世紀後半から十七世紀前半に至る文化的様相は、広義でのいわゆる安土桃山文化によつて代表されよう。この文化の特色の一つとして、第二に公家文化と並ぶところの仏教文化がある。現実的、世俗的であり、いわば彼岸性が濃厚であつた。

思想的にいえば、この仏教に代わつて新たに登場してきたのが儒教であつた。儒教も朱子学的な自然秩序論のもとに、階級的、身分的に人間を禁縛する地上の宗教的性格をもつたが、それはあくまでも現実

社会の地上の領域における規範的倫理であつた。このような現実的、彼岸的風潮は、当代の美術を代表する装飾画の世界においても顕著となつている。これまでの仏教的題材はしだいに退潮し、洛中洛外図など庶民生活の現実を描いた風俗画の発展や、建築、彫刻の面での仏教美術の衰退をみるに至つた。江戸幕府の統一原理の核になつた儒教はいうまでもないことであるが、江戸時代を通じて男子のもつとも重要な基礎教養の一つは漢学を修めることにあり、四書、五経は極めて重要な古典であつた。その代表的な学者には、新井白石、木下順庵などがいるが、將軍綱吉も湯島に聖堂を建立して一層儒学を盛んにした。

先にも述べたように、日本人の生活の上に西欧人が与えた影響は大であつた。特にキリスト教の一神教としての絶対神の信仰は、日本人の伝統的な思考方式としての神人合一的思想と著しく接触し、神の前における人間平等の思想は、封建社会の成立基盤思想を否定することにもなつた。これは、鎖国後も徹底的に禁止された。宗教史の中でこれほど禁圧された宗教の歴史はないといわれているが、この時代もこれが少しも緩められなかつたことは注目されることであらう。

第二としては、文化圏の地域的拡大であつた。中央文化の地方への影響と移動はすでに戦国期に小京都などといわれる形で進行したが安土桃山時代になると、各地の鎖国大名の拠点である城下町に中央文化や文物の伝播が著しくなつた。

第三の特色としては、第二と関連して、文化の庶民化、大衆化の傾向が現われてきたことである。中世においては、文化は、貴族と士社、上級武士の独占するところであつたが、戦国頃から町人を中心として庶民階層が文化の創造者あるいは、享受者として文化的世界に登場してきたことであらう。

これまで江戸時代の特色をみてきたが、次に信仰の実態について触れてみたい。

三、江戸時代の信仰と実態

鎌倉時代におこった新仏教、とくに日蓮宗と浄土真宗の発展にはめざましいものがあった。新仏教が隆盛を迎えたのは、それが民衆の生活の中に深く入り込んだといったところに理由がある。もちろん、宗教の深化発展をはかる基準を全て民衆生活との関連で論じるのは誤りがあるかもしれないが、この時代というのはそれをリードした大名にかかわらず、あらゆる階層の人々が中世秩序から解放された時代であった。日蓮宗と浄土真宗が民衆の間に深く入っていったのは必ずしも同じ方法によったものではないが、前者は、京都を中心とする新興の町人、後者は、農村へとそれぞれはつきりした布教の対象を定め、それに応じた布教活動を展開した。ほとんどの仏教各宗派が、江戸時代においては権力者に服従し、その保護を受けていた。その中にただ一派、あくまでも権力者に服せず、キリシタンと同様、徹底的に弾圧されたものが日蓮宗の中にあつた。天文の乱では浄土真宗を敗退させた日蓮宗であるが、信長はその勢力が高まるのを喜ばなかつたといわれている。法華経の正統解釈は、自分の主張以外の他宗の存在は認めないというのが日蓮宗の考え方であつた。これは、ただ他宗の存在を主観的に認めないというだけでなく、折伏によつて他宗を滅ぼさなければならぬとするものであつた。となると、安土宗論で敗退した以後の日蓮宗の存在は宗義の基本を放棄しているわけであり、これは矛盾した存在であつたのだから。この矛盾に苦しめられていたところに豊臣秀吉が方広寺大仏殿において法会を行なつた。そこでここに日蓮宗、天台、浄土宗など八宗から僧が招かれたわけであるが、日蓮宗の中で紛争が起つた。秀吉は法華経の信者ではなかつた。すなわち彼は、折伏によつて過ちを反省させる対象でこそあれ、供養を受くべく相手で

はなかつたのである。法華経を信じない者と宗義上の関係をもつてはならない、つまり不受不施の原理がここで試練にたたされたわけである。あくまでも不受不施の立場を貫いた妙覚寺の日奥は一六〇〇（慶長五）年対馬に流された。

これに対して浄土真宗は、本願寺第八代の蓮如によつて教線が拡大された。彼は数々の教義解説文章（御文章）を書いたが、その中の一枚に、

「あながちに我が心の悪きも、また妄念妄執の心の起るをも止めようというにあらず」

というところがある。これは、人間の世俗的な存在に対する罪惡観のことをいっているのであるが、彼は、信者にそれを罪惡とみて内省するようなことをしてはいけないと教えている。世俗的存在が、罪惡であることを内省すれば、そこに宗教はありうるが、教団は成り立ちにくい。逆に彼は、世俗的存在の罪惡性を大いに強調しつつそれから逃げられるのは弥陀の本願にすがる他力信心しかないという方向に動かしていった。そして、一心に念仏を唱えて現世往生を願う人々を「講」の組織に吸収していった。

次にキリスト教について少し触れてみたいと思う。島原、天草の一揆や、あるいはまたキリシタン信徒の上につた数々の弾圧³のことからこの時代に入ってきたキリスト教は、はじめから反権力的な性格をもっていたかのように思われがちである。この権力への反抗は、政治的外交的な理由によつてキリスト教の信仰が禁止された時、日本人信徒によつて見いだされた新しい論理なのだといいてよいであろう。キリスト教と仏教、および神道信仰、この間は越えがたい思想の溝があるが、その相違がすぐに政治的な反抗につながるということはないかであるといえる。また、キリスト教があのように急速に日本人の間に浸透していった理由に、はじめてやってきたヨーロッパ人とその文

明に対する好奇心が手伝つたことを否定できないであろう。しかし、何よりも唯一の神に対する絶対の信仰というキリスト教の論理が、旧秩序が崩壊し、それに変わる新しい倫理がなかなか確立されない不安なこの時代にあつて、非常に力強いものであつた。仏教と肩を並べ、信者が七〇万人ともいわれ隆盛をほこつていたキリスト教も、天下が信長から秀吉に移るにつれて壁にぶつかることになつた。いわゆる禁教措置である。また、家康の腹心、長谷川藤広と後藤庄三郎も、家康に対し、キリスト教の危険性を説いたとも伝えられている。側近には、金地院崇伝や天海という僧侶がおり、崇伝は、ヴィスカイノに与えた宗教、貿易分離の書簡や一六一三（慶長十八）年の伴天連追放令を執筆している。しかし、これについては、崇伝は単に作文、執筆の任に當つたのみなのか、あるいは多少彼の意見も加わつてゐるのかわからない。が、家康にキリスト教排斥に関してなんらかの影響を与えていたと考えられる。しかし、信仰を棄てることができないと考えていた信者たちは、下層の社会に多く、彼らは危険を顧みずに布教を続ける宣教師に指導され信仰を深めていった。一六二九（寛永六）年信徒の発見と転宗の強制がはじめられ、翌年には寺請制度がはじまつた。

これまで、この時代の信仰の実態について述べてきたが、次には神道と庶民信仰の關係についてみてみたい。神道説においては、平安時代以来の本地垂迹説に対抗して、仏法を採り入れ、加持祈禱に重点をおく吉田兼俱の唯一神道（吉田神道）の説がはじまつた。吉田家は京都吉田神社の祠官の家柄であるが、唯一神道を唱へはじめてからは、神祇伯の家である白川家に対抗するようになり、天皇や室町將軍家に取り入つて自ら「神道管領長上」であると唱へた。つまり、我こそ日本神道の統轄者であると称したわけである。江戸時代初期の神道は、社会的勢力という点からみれば、仏教の勢力に押され特記することがないように思われる。しかし、これを庶民と神社との關係の面で考え

ると、とくに農村における氏神、および産土神信仰の強化する傾向を見逃せない。体系を完成した神道が先にあつて神社が設置されたわけではないので、その点全く仏教とは違つてゐる。仏教理論の進化に触発されて起つたのが神道説であるという事情は、農村の神社信仰にも少なからぬ影響を与えたのである。それを一言でいえば、神社と庶民との間に宗教機能を介入させてゆくことである。村の神社は村人たちによつて祀られてゐる。神社は、個人の信仰対象であるよりは、農耕の繁栄と村落共同体の安定的結合をはかる機能的な存在であつた。しかし、そのような村の神社の中では、長老格の人物が専門的に神社行事の運営にあたるようになり、それはやがて世襲的な神職神官をおくような機構へと社格そのものが変化してゆくことがあつた。つまり、共同体の要としての神社の行事に参加しながら、もう一方では共同体行事から一歩踏み出した個人の信仰のつながりが地域的でなく、一つの具体的な信仰の対象のもとに出来上つてゆくのであろう。このような形のものとしては古い時代から続いている修験道があつたわけだが、戦国時代には長谷川角行という人物が出て、富士山を信仰対象とする富士道を起こしたといわれている。

次に、江戸時代における庶民信仰の社会的現象をみてみよう。当代の文化生活への情勢は、封建治下の抑圧生活から自己を解放するきわめて文化的なことで流行をみせた。この庶民の生活は、祭礼とか、盆踊りその他由緒ある寺院や神社などいわゆる名所巡りの遊びまた信仰による遠出の旅など様々な新しい現象が現われた。特に、江戸は世界的にもおそらく最大人口都市に成長していったと考えられるので、他の都市に現われなかつた珍しい現象が発生したといわれている。例えば、富士信仰と弥勒浄土思想を結合し、山岳信仰における女人禁制を解放したかなり反体制的な庶民信仰が享保頃から提唱された。それは、やがて盛んになり化政期には、江戸の各地に人工の富士山が造営され、

六月一日の山開きに際し、五月晦日からこの江戸各地の富士に信者たちをはじめ、多数の群集が登頂している。これは、江戸の町人たちが開発したことであつたらしい。また、西国三十三か所、四国八十八か所、金刀羅、羽黒山、御嶽、富士大山など人々が出かけていったといわれている。

このような行動文化熱は驚くべきもので寺や神社側の対応も新しい展開をみせていた。一八三八（享保九）年に斉藤月岑が著わした『東都歳時記』の中にそれらの記事が次のように載せられているので、三列記してみると、

——大名の屋敷内に人工の富士山があり、
年二回だけ登山が許された——

深川富岡八幡の富士参り

その記録には、六地藏、江戸各地区の三十三か所観音参りなどがあるが、その中では地藏尊の俗称が記されているのが興味深い。その地藏の頭文字だけをあげてみると、

——子安・火除・子育腹帯・朝日・夜深・日限・女体身代・身代・堅田・子返・勝軍楔・満米（まんまい）・蕃椒（とうがらし）・願成就・青葉福満・伽羅（から）・陀山・落馬・疣・厄除・泰山・黒衣・頬焼・如意満・一言・出世・帰国・踊躍（ゆやく）・引接（てびき）・見返・縁引・世嗣・顧眄（みかえり）・安産・愛敬・開運・三面・垢（がけ）・水掛・子援・目洗・医王・入定・田植・土中出現・塩・塔婆——

などの名で呼ばれていた地藏尊が多くの群衆に捧まれていた。

おわりに

以上、江戸時代の特色と、当代の信仰、および庶民信仰の実態を述

べてきた。江戸時代は、武家や庶民はそれなりに、主人と家来の主従制が重層構造の人間の権威によって貫徹している社会であつた。

キリスト教のようなエホバの神とか、中国の天帝のような絶対神をもたない社会構造を特色としていた。神の前には皆同列であるという思想は我国にはなかつたようである。それゆえ、現存する人間の権威を絶対視する思想が古代以来伝統的に展開してきたのである。当代は、この思想によって人々の存在を最も多様な序列段階に刻み上げた時代であつたといえよう。

次に、第一章で述べた庶民信仰の立場から考えてみると、祈願の多くは、専門の宗教者をわずらわすことなく、庶民たちが自分で行なっていることが多い。社寺、神棚などで祈願するわけである。その方法は、社寺などに参詣する時は、願い事を記した絵馬などを奉納して祈念する。また、神仏に対して自己の誠意を示すために一般に願かけと呼ばれる、お百度、そして断食などの修行を行なうこともある。その祈願の内容は、健康や、商売繁昌など実に様々である。だが、それらに共通していえることは、それらの問題に関してより良くなること、現状を保つこと、挫折の救済の三つであると考えられる。もつとも、神仏は、必ずしも、苦しみを全て打開してくれる存在でなく、逆に粗末にすると、かえって災害や不幸を招くと信じられている点であろう。よつて祈願は、積極的なものと、消極的なものがあるわけである。

これまで、日本人の信仰心についてみてきたが、確かにいえることは、信心深いということである。かつては、その深淺が日本人の人物を評価する重要な基準の一つに数えられていたほどである。それを日本人は、神信心と称した。この場合の神は、西欧人の観念する一神教的な神（ゴッド）の概念と同一視することはできない。むしろ多神教的な匂いがする神概念であるが、ともかく、人間の力を越えた絶対者に対する崇敬は極めて強い。しかし、その絶対者は、必ずしも超越

的な唯一神に限定されることはなかった。したがって、ときには、自然宗教の段階にとどまるかのような印象を与えたこともある。また、神仏も、場合によつては釈迦もキリストも、その他の対象となりうるものは、なんでも区別することなく全て崇拜しようとするようにみえる。そこに日本人の信仰生活を一層重層化、複雑化させているわけがある。

ゆえに、宗教の統制というのは不可能であり、また、信仰心はそれぞれの心の中にある神の問題となつてくるのであろう。

〈註〉

(1) 桜井徳太郎『日本民間信仰論』参照

(2) 安土宗論とは一五七九(天正七)年五月、日頃法華宗の勢力増大を憎んだ織田信長が、安土城下の浄土宗浄厳院で、計画的に法華宗と浄土直宗の間に宗論を闘わせ、一方的に法華宗を敗北と判定し、これを弾圧した一件をいう。この時信長は、法華宗妙覚寺以下十三か寺に託証文を強制的に書かせたという。託証文は三か条からなり、第一条には「今度、於江州浄厳院、浄土宗と宗論仕り、法花(華)負け申候事」とあり、次に今後は他宗に対して一切法難(折伏)を仕かけないこと、第三条に法華宗の存続を許されたことをありがたく思うこと、などが誓紙起請文を形で誓わされている。

(3) 一五八七(天正十五)年、豊臣秀吉は島津氏討伐のため九州に向い博多で初のキリシタン禁教令を発した。いわゆるパテレン追放令で、キリシタンは邪法であるとし、二十日以内に国外に退去すべき旨が命ぜられている。

(4) 崇伝は、足利義輝の臣一色秀勝の第二子として、一五六九(永禄十二)年に生まれた。一五七三(天正元)年室町幕府がつぶ

れてのち、南禅寺に入つて僧となつた。一五九四(文禄三)年二十六歳のとき、出世つまり住職となる資格を認められ、福厳寺、禅興寺などという寺の住職をつとめた後、一六〇五(慶長十)年二月、鎌倉五山の一つ、建長寺の住職となり、さらに翌三月には南禅寺の住職となつた。

天海は、足利十一代將軍義澄の子ともいい、また十二代義晴の御落胤などとも伝えられているが、いずれも疑わしく、おそらく会津の豪族蘆名氏の一族であるうといわれる。また、日本史上珍しいほど長寿者といわれているが、その記録は様々であり、いろいろ神秘的な伝説がまつわりついている。

(5) 最も一般的なものは、「氏神」であるが、これは本来は氏族の祖先ならびにそれと関連のある神をさしている。この氏神に所属する人を氏子と呼んでいる。氏神と並んで一般に広く用いられているものに「鎮守の神がある。かつての小学校唱歌でも「村の鎮守の神様の今日はめでたいお祭り日」と歌われていた。また鎮守の杜という表現も我々には身近なものである。この鎮守の神は一定の地域を領有し、その地域を領有し、その地域の人々を守護する神という意味を強くもっているのである。次にこれも古くから使用されている呼び方に「産土神」(うぶすなしん)がある。これはその言葉通り、自分が生まれた土地の神という意味をもっている。そうして産土神に対して自分のことを産子と呼んでいる。なお、現在氏神といった場合には、直接祖先神と関係した本来の氏神の他に、鎮守神、産土神の意味も含めている。それゆえ、これを広義の氏神ととらえることができるのである。